

## 【書評】

### 水野雅夫『小学校における社会科地理教育の実践と課題』

(古今書院 2017年12月13日, 148頁, 3,500円+税, ISBN:978-4-7722-4205-9)

本書は、愛知県豊田市内の小・中学校において35年間教育実践研究に取り組まれた水野雅夫氏が、地理教育研究誌に投稿された中から、主に小学校社会科地理教育に係わる実践記録をまとめたものである。実践年時の古いものから実践記録が配列されている。本書の構成は以下の通りである。

第1章 社会科実践の特徴と考え方

第2章 事実認識から要因追究へ向かう単元構想-小4 地域開発単元を事例に-

第3章 共通問題の設定方法-小3「商店街」の実践を通して-

第4章 実践三河仏壇における地理教育的視点-小5「三河仏壇」の実践を通して-

第5章 小学校社会科における地理教育的視点-小5「豊田の自動車工業」の実践を通して-

第6章 森林の学習を通じた環境教育の展開-小5社会科実践における地理教育的視点-

第7章 生活科における地理的能力および安全意識の育成-小2「通学路の安全チェック」の実践を通して-

付章 熱中する中で仲間意識を育てる-小2 生活科「こいのぼり」の実践を通して

第1章では、小学校社会科に対する水野氏の考え方が示されている。ここでは、小学校社会科は、「探究的な授業の割合が2～3割」,「(探究的な授業は、評者補足)せいぜい2～3単元または2つの教材がいいところ」,意見を気兼ねなく出し合い,友人の意見と比べて話し合い,自己の考えを深めるための学級経営と密接にかかわり合った高学年の8点の手立て,基礎学力を習得するための7点の手立て,社会科の探究的な指導過程等,実践展開上の有益な氏の見解や知見が披瀝されている。

第2章では、追究の授業づくりの際、地理学の論文を書くときのように、その構成を要因追究的に組んでみたいという思いから、事実認識から要因追究する単元構想が提案されている。これは、大学院時代に恩師の「玉ねぎの皮をむくように、なぜ、なぜ、なぜと要因追究するような学習が望ましい」という言葉を胸に刻んでいたことと関わっている。

第3章では、教師の指導と子ども達の話し合いが上手にかみ合った勢いのある授業をつくりたいという思いから、共通問題の設定方法を工夫した実践が報告されている。36頁の〈共通問題設定の手順〉と〈指導するときの原則〉は、実践者にとっては参考になろう。この実践では、追究過程の検証をU子の追究の様子から行っている。この方法は、直接的には愛知教育大学附属岡崎小学校等の研究が影響しているが、後述のように、社会科の初志をつらぬく会(別称:個を育てる教師の集い,略称:初志の会)の考え方にその淵源がある。

第4章から第6章までは、小学校社会科学習に地理教育的視点を組み込んだ実践が報告されている。第4章では、地域教材を開発した「三河仏壇」の実践が報告されている。第5章では、先行研究を検討した上で、7点の地理的見方・考え方が提示され、それらの地理的見方・考え方をつけさせようとした実践が報告がされている。氏は、この実践により、

「子どもの意欲的な学習＋社会科地理教育の実践の融合をめざす」という氏なりの「本質的な地理教育の考え方」が形成されたようである。第6章では、環境教育に導入可能な地理教育視点を明らかにしようと、社会科、国語科、道徳、理科の4教科・領域にまたがる実践を行った。研究者が声高に提唱する前から、そのような体裁の良い言葉こそ使わないが、世の力ある誠実な実践者はカリキュラムマネジメントを行ってきていることが分かる実践でもある。

第7章では、家から学校までの通学路の安全チェックをし、その気づきを組み込んだ手描き地図づくりを行った生活科実践の報告がされている。

付章では、「こいのぼり」と関わる活動に熱中して取り組む中で、仲間意識を育てた生活科における「仲間学習」の実践が報告されている。

先に「主に小学校社会科地理教育に係わる」と述べたのは、社会科実践ではない第7章及び付章の生活科実践が掲載されているからである。書名が『小学校における社会科地理学習の実践と課題』であるにも係わらず、第7章及び付章があるのには、それなりの理由があろう。第7章の地理的能力の育成を意識した生活科授業実践の掲載は理解できる。だが、付章は、社会認識形成と係わるとか地理的学習の色彩があるということとは、ほとんど無縁の生活科実践である。なぜ、付章として掲載され、本書に集録されているのか。本書を読むと、二つの通奏低音があることが観取できる。本書に流れる第1の通奏低音は、「小学校社会科にもっと地理教育的視点を！」とでも言うべき考え方である。第2は、「個を育てる、個に寄り添った教育実践を！」とでも言うべき考え方である。第1の主旋律と第2の副旋律とが調和しながら、本書が奏でられて行く。評者は、A子に仲間意識を持たせ、自分の気づきに自信をもたせようとした付章の生活科実践は、第2の通奏低音に特に係わる実践故に、氏がこだわって掲載したと考えている。しかも、読み進めると、氏がキャリアを積む中で、徐々に第2の副旋律の音色を高めていったことが感じられる。その証左として、最初期の実践を掲載した第2章の最後に、破線で囲って掲載されている次のような現在の氏の考えをあげておきたい。

私は、この実践記録を書いた当時若かったため、地理教育にこだわる傾向があった。経験を積んで、社会科そのものを理解するようになり、道徳との関連で生き方の追究が楽しくなった。様々な教科が有機的につながり、総合的に一人の子どもの学びを形成していくことが実践的に分かるようになると、地理教育にこだわる必要はないと感じてきた。社会科地理教育という概念は、あくまでも学校教育の中の話であるが、一人の人間を育てることに着目すると、社会科地理教育はあくまでも学校教育1つにすぎず、注目する教師が多くないことも分かるのである（p.32、なお、傍点は評者）。

「個を育てる、個に寄り添った教育実践を！」とでも言うべき考え方は、三河の地で実践を展開して来た水野氏だからこそ、培われた実践観であると感じる。本書に示された、教師の出場を考えること、個に寄り添った授業実践、座席表やカルテを活用した授業実践、抽出児を追った授業実践、一人調べを取り入れた授業実践等々から、初志の会の考え方に影響された三河の地の授業という感じを持つ。氏が進めた再現学習は、初志の会の有力な実践者である前田勝洋氏から教えを請うたことがきっかけであった。また、氏が、勢いのある授業づくりの中で50%発言を目当てとしていたことも、初志の会の研究校的地位にあ

った愛知県新城市立新城小学校の全校あげての 50% 発言を目標とした授業研究の影響があると思える。事実、「あとがき」には、30 年ほど初志の会の機関誌である『考える子ども』を読んでいたり、初志の会の研修会に参加したことが述べられている。また、授業記録に見られる「考えで」とか「思ったことでは」と前置きしてから発言する子どもたちのあられから、三河で盛んであった日本学び方研究会の影響もあるように感じられる。本書は、三河の教育風土が産んだ教育実践の数々が集録されている。

さて、「小学校社会科にもっと地理教育的視点を！」とでも言うべき考え方に基づく氏の一連の実践の基盤には、学部時代及び大学院時代の地理学の学びがある。2 章から 7 章までの各実践からは、そこかしこにそのことが感じられる。特に、フィールドワークを基軸とした地理学の学びをどのように教材開発に活用していくかの道筋が示されている 23 頁から 24 頁にかけての教材研究の過程の記述は、出色であり、学部時代及び大学院時代の地理学の学びに裏打ちされた授業実践であることを如実に物語っている。

「あとがき」には、「愛知県三河地方の学校は、『管理教育』『提灯学校』などと揶揄されるほど勤務時間が長いことで知られる。」(p.148) とある。評者も、20 数年前に三河地方の小・中学校に勤務していた折り、それなりにやりがいは感じられつつも、「いったい、時給にしたらいくらになるか」という思いが脳裏をよぎり、昨今よく言われるブラック感を感じたことが、しばしばあった。氏の実践は、このような厳しい状況下で紡がれてきたものである。だから、氏は、「仕事は周りの教職員と同様に行うが、研究だけは忘れまいと自分に言い聞かせながら勤務してきた (p.148, 傍点は評者)」のであろう。厳しい現場の現実と向き合いつつ、誠実に実践を積み重ねてきた氏だから、「本格的な問題解決的学習の記録はない。しかし、記憶一辺倒的な実践もしていない。」という「中途半端な実践」スタイルが生まれたのであろう (p.7)。授業時間が制約される、テストで点が取れるようにさせなくてはいけない等々、理想と現実との狭間で苦悩し、少しでもより良い実践を目指す中で逢着した授業スタイルが、ここにはある。もし、これらの実践を常識的〇〇タイプの授業研究などと評価するむきがあるならば、兵庫教育大学の米田豊氏がしばしば吐露していた「社会科教育学栄えて社会科教育減ぶ」という言葉を思い出さざるを得ない。評者は、「中途半端な実践」、まずは大いに結構ではないかと思うのである。

本書の実践は、1984 年から 2009 年までのものが掲載され、その時々状況下での氏の問題意識に基づいて実践スタイルが微妙に変わっている。そして、氏が現在から見たその実践の位置づけや実践への思いが、破線で囲った形で各実践記録の最後に述べられ、読者の理解を増すようになっている。この各章の最後に破線で囲まれた水野氏の現在辿り着いた考え（見解や知見）が挿入されていることが本書の魅力の一つとなっている。本書は、氏のライフヒストリーがうかがわれるものとなっており、教師の力量形成の実際を考える際に、参考となる知見も得られよう。さらに、本書では、「はしがき」での「引用が施されていない断定的な文章は、実践経験から得られた確実な知見である」(p.iii) という記述からも分かるように、研究的な実践を積み重ねてきた者だけが述べることができる知見が散見される。また、実践者としての矜持が感じられる一書でもある。後に続く実践者への参考と励ましになるにちがいない。多くの方に一読を勧める次第である。

(伊藤裕康)